又、小島憲之氏は著『古今集以前』の中の「比喩的表現」の頁でこの道真の句をひかれ次のように論じられている。

（傍線　筆者）

○雪を白雲に見たてたもの。

島田忠臣の「人間去却りて踏む白雲の天」（巻上、観禁中雪）もその一例。また菅原道真の「雲は独り磵に宿るかと誤つ」（『菅家後集』東山小雪）も、雪を谷間に沈む白雪になぞらえる。この比喩は漢詩の手法に基づき、平安詩人や歌人たちが採用した、いわゆる「外」からの比喩である。もとは日本的なものではない。

○鶴を愛した白居易には

「松には疑ふ鶴の散ずること遅きかと」（『白氏文集』『後集』巻五十六、和劉朗中望終南甫山秋雪）

「翅を曝せば常に疑ふ白雪の消たらむかと」（同、池鶴二首）の如く、雪と白鶴とをそれぞれ比喩として捕える。友人、元稹の詩にも「孤飛して空鶴唳き、裴回して霜雪耀く」（巻三、松鶴）とみえる。

やがて鶴と雪との比喩は、平安人の詩にも及ぶ。

道真の、「鶴は未だ田に帰らざるかと疑ふ」（『菅家後集』東山小雪）にもみえ、白詩に学んで雪を白鶴になぞらえる。忠臣の「叙雪、五十韻」（巻上）にみえる「松に栖む鶴自らに馴る」も、その表現に雪が背景となる。

このような詩の比喩は次第に歌の常識的なそれにも及ぶ。

紀貫之の